

熱帯に恋して

山口 進 (文と写真)

私が小学二年生の時、父が一枚の写真を見せてくれた。

写真には学生服を着た父が写っていた。私の目を釘付けにしたのは父の後ろに広がる景色だった。写真はフィリピンの南にある小さな島で撮影したと教えてくれた。海洋学者である父は練習船に乗ってたびたび日本のはるか南の島々に出かけていたのだ。

「熱帯はすごいぞ。一年中暑くて色々な果物がある。深い森の中には派手な色をした大きな蝶や美しい鳥がいくらかもいる。人はのんびりしていて親しみやすい」

私はこの言葉で熱帯の洗礼を受け、それ以来、冒険や探検の本を読み熱帯への夢を膨らませていった。

夢は消えることなく十数年後に私はニューギニアへゆく貨物船に乗っていた。

北回帰線を越える時、これから熱帯圏に入る、というアナウンスが流れ、私の胸はいやが上にも高まっていった。ニューギニア島のマダン港に着く一日前、船は赤道を越え、船では「赤道祭り」が催された。様々な姿に仮装した

船員が甲板で踊り、寸劇が披露された。

翌朝、鳥影が見える少し前に私は甲板に出た。高湿度のむっとした空気が私を包み込み、熱波が襲ってくるのを感じたときには抑え切れないほど興奮していた。

不安を抱えたまま約三ヶ月間、私はニューギニアを一人で旅し、父から聞いていた熱帯を自分の目と肌で確かめることができた。見知らぬ果物も手にとり口にして熱帯を感じた。街から離れると、そこには緑滴るジャングルが広がり、図鑑でも見たことがない色とりどりの蝶やハチが数え切れないほど花に訪れていた。

やがて写真家となり、少年時代に憧れた熱帯を迷うことなく自分の活動の場とした。

蝶や甲虫などを次から次へと撮影しても切りがないほど生物が溢れ、季節を変えるとまた新たな生物を見ることができた。人々との交友や生活が充実してくると熱帯への思いはさらに強くなっていった。

初めは様々な虫や花を撮影することに熱中していたが、